

平成 21 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18530413
 研究課題名（和文） 「戦後」の「記憶」を問い直す - アジア・ポストコロニアリズム・ジェンダー
 研究課題名（英文） Critical Studies on Postwar memories
 Asia, Postcolonialism, gender
 研究代表者
 李 省 展 (I SONJON)
 恵泉女学園大学・人文学部・教授
 研究者番号：10279664

研究成果の概要：

本研究は、人々の日常にどのような形で「戦争」と「戦後」の「記憶」が根つき、継承されつつあるかを、アカデミズムや国民国家の枠を越えて採集、編集、分析し、偏狭なナショナリズム解消のために活かそうとしたもの。その成果は、各メンバーによって書籍・論文・口頭発表の形で公表されたほか、HP (<http://www.postwar-memories.org/>)でも公開されつつある。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	630,000	4,230,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：細目票キーワード：文化・社会意識

細目表以外のキーワード：ナショナリズム、アジア、ポストコロニアリズム、ジェンダー、「在日」

1. 研究開始当初の背景

2005～06年当時、日本及び近隣アジア諸国においてナショナリズムが高揚し、アジア・太平洋戦争と日本による植民地支配についての「記憶」の差異が一層鮮明になった。研究の世界では、既にその原因の究明や「反省」が語られていたが、それらはアカデミズムの閉ざされた枠の中でのものに過ぎなかった。

2. 研究の目的

本研究は、市民としてまた研究者として、こうした閉塞状況を打開したいという思いから出発した。各分野の研究用語、若しくは大文字の言語に頼ってナショナリズム分析

を行い足れりとするのではなく、むしろ、自らの専門分野（社会学・歴史学・文学・教育学等）とナショナリズムの共犯関係を明らかに出すことを、ひとつの目的と考えた。

と同時に、日本を含むアジアの人々の「記憶」を採集し、相互のずれや歪みを、なるべくステレオタイプな語りには回収せず、すくいとすることで、対話の契機を得たいと考えた。

最終的には、その成果を、アカデミズムの世界に発信するのみならず、国籍・民族・ジェンダー・イデオロギー等を異にする様々な立場の市民に向けて発信しようと考えた。

3. 研究の方法

本研究では、上記のようなナショナリズムの高揚に強い危機感と問題意識を持つ研究者を社会学・歴史学・文学・教育学・国際関係・法学等の異分野から募り、作家として活動中のメンバーの協力も得て、まずそれぞれの用語と研究方法を相対化することから始めようとした。また、映像による記録を重視することで、体制の言語に整序されない「記憶」の発掘にも貢献しようとした。

研究成果の発信も、外国(語)での発表や、HPによる公表などを試みた。

4. 研究成果

研究に参加した各人による成果のまとめを、口頭発表順に紹介する。なお、各人の研究会に於ける口頭発表資料等は、別途研究会HPにて公開中である。

(1) 姜信子(作家・研究協力者)

*姜氏は、石垣島在住の87歳の女性でお座敷芸者として1930~40年代にかけてサイパン等を渡り歩いてきた方の「記憶」をともに辿り、映画や小説の形で記録しつづけている。その成果の一部を以て、報告に代える。

記憶を物語として語る試み

~沖縄最後のお座敷芸者ナミイの「ハワイ・ホノルルお座敷遊びの旅」をめぐる断章~
(スペースの都合により本報告では「1」のみを公開。全編は研究会HPにて公開中)

1. 「本が天から降ってきた」

きのうアンタと同じ「島」の女に会ったさ。島？ おばあ、私は島の生まれじゃないよ、ヨコハマの生まれよ。ヨコハマ？ 知らないな。でも、そこも「島」のはずよ。人はみな「島」に生まれて旅に出るものだからよ。そうじゃなかったら、アンタはどこから来た？ どこにいる？

小さい島、大きい島、いかめしい島、なだらかな島、黒い島、赤い島、緑の島、白い島、激しい島、穏やかな島、世界は無数の島でできている。人みな島に生まれ、島から島へと旅しながら歌いながら生きていく。それが石垣島の八十七歳の三線弾きのおばあへの教え。三線おばあが会った私と同じ島の女とは、朝鮮半島由来の姓を持ち、日本に生まれ育ち、そしてニューオーリンズで生まれた音楽を歌い奏でる人。

おばあに言わせれば、その人は朝鮮半島という「島」にご先祖を持つ旅人で、それが私と同じ。島から島へ旅するうちに三線の音に呼ばれておばあに会い、一緒に歌い遊ぶようになった。それも私と同じ。(中略)

三線おばあと一緒に歌の旅に出る、旅の空の下、三線おばあと一緒に見知らぬ旅人たちと歌を行きかわせる、想いを通わせる、行きかう歌と想いが私の生に織り込まれていく、縁を結び、約束を交わしたということはそう

いうことなのでしょう。そして.....、

アタシの話したことは、アンタが文字に刻めよ。

三線おばあが折りに触れ私に突きつけるその言葉も、おばあ願いと同時に、見知らぬ島々の旅人たちの願いでもあるように私は聴いていたのです。

歌では伝えきれない、われらの生、われらの想いを、おまえが文字に刻め。

そう彼らは言っている。そう私には聴こえる。おまえの言葉にわれらの声を織り込んでいけと。ああ、自分の言葉さえまなぬというのに.....。なかば怖気づき、でも、これも縁なのだろうとなかば覚悟し、アメリカ歌の旅へと私は心を向けていったのでした。

(中略)

ずっと考えていました。三線おばあを旅して、島々の旅人たちの声に耳を澄ませて、どんな想いを受け取り、どう文字に刻む？ まだ腰が引けている、いや、もう、いいかげん腹をすえよう.....。私は「千一夜物語」を機内に持ち込んでいました。だって、これは、語り続けることが生きることである物語だから。

夜から朝への長い飛行、厳しく赤黒い火山島の顔をしたオアフ島が姿を現す、はじめまして！ 挨拶を送る、着陸態勢、その時、斜め前の座席の下に本が落ちているのを見つけてきました。

周囲の誰もが自分の本ではないと言う。ならば私が、拾いあげた。目を疑った。「千一夜物語」。私の鞆の中の本と寸分違わぬ岩波文庫版。新しい。読まれた形跡がない。

ためいき、天を仰ぐ、目をつぶる。ああ、これはきっと、島々の旅人たちからの贈り物。

ようこそ、われらの島々へ。さあ、おまえが生き、われらが生きるために、語れ、われらの物語を。

着陸。目をあける。席を立つ。声のほうへ、物語のほうへ。私は静かに歩き出すのです。

(2) 李泳采(人権論)

敗戦直後、日本には220~240万人の在日朝鮮人が在住した。祖国が解放されると直ちに帰還が始まり、1945年8月から50年6月までの間に、およそ150~190万人が朝鮮に帰還した。しかし、1950年6月に朝鮮戦争が勃発すると、南北に分かれた朝鮮半島に帰還する際、驚くべきことに多くの帰国者は故郷である南ではなく「北への帰国」を要求し始めた。この帰国要求が59年12月ついに実現し、最初の帰還船が新潟を出港して清津に向かったのは12月14日のことであり、同船には957人が乗船していた。その後、協定による配船が終了する84年の第187次帰国までに合計93,339人が帰還した。非帰化朝鮮人を含む日本国籍所有者は6,679人(そのうち1,871人が日本人妻)であった。およそ25

年間に10万人近い人が「社会主義祖国」朝鮮民主主義人民共和国に「永住帰国」したのである。これを「帰国運動(帰国事業、帰還、北送事業)」という。

58年8月11日から始まり、実際第一次帰国船が出発した59年12月14日まで、北朝鮮と朝鮮総連による集団帰国運動は主に三段階に区分できる。第一に、集団帰国運動の「大衆化期」(58年8月11日~59年2月13日)である。第二に、集団帰国の「実現化期」(59年2月14日~8月13日)である。第三に、「帰国者の拡大化期」(59年8月14日~12月14日)である。当時、北朝鮮の集団帰国運動の実施には三つの目的が主に主張された。第一に、日朝国交正常化運動としての帰国事業である。第二に、日韓会談阻止としての帰国運動である。第三に、労働力の不足を補うための帰国運動である。

在日朝鮮人の帰国運動は、戦後日朝関係史において重要な出来事であった。だが、これまで在日朝鮮人の帰国運動は、殆ど公式的な学問の対象にはならず、戦後日朝関係史において長い間「空白の歴史」のまま放置されてきた。最近ようやく日本人拉致問題とともに、日本人妻問題、そしてそれと連動する在日朝鮮人の帰国問題に関して研究成果が出始まっているが、帰国運動の主体である朝鮮総連と北朝鮮の意図を中心に学問的に分析したものは殆どない。

在日朝鮮人の帰国運動は、冷戦時期のイデオロギー対立の中で、居住地選択・移動の自由がなかった人々が、新しい祖国「北朝鮮」を選択し移動した「国境と人々の移動」の典型的な事例である。45年以前、日本によるアジア太平洋戦争のとき、多くの朝鮮・台湾の人々が「強制連行」などの形で生活空間を強制的に移動させられたことは、在日朝鮮人の生活空間に対する記憶の形成に重要な影響を及ぼしている。この研究会を通じて、在日朝鮮人の帰国運動を考えると、「戦争と生活空間の移動」の問題をともに考える必要性を感じたのは大きい成果であった。そして、在日朝鮮人の帰国運動に関する各国の公開情報が乏しい中、この研究会の支援で、スイス・ジュネーブにある国際赤十字の「在日朝鮮人帰国運動関連公開資料」に目をとることができ、在日朝鮮人帰国運動の全体像を描くことができたことに心より感謝したい。

(3) 篠崎美生子(日本近現代文学)

日本近代文学が、人の「内面」を書き/読む装置として展開し、それが国語教育(国家権力)とのコラボレーションによって、人々の思考の枠組みを形成してきたことは、早くは柄谷行人が指摘し、以後篠崎自身も論じてきたことである。本研究では、ことに近代文学がもたらしたこの「内面」の制度が、権力者への自発的な共感を入々に強い、その責任

追及の回路を閉ざしていったメカニズムを明らかにした。

具体的には、中野重治の小説「五勺の酒」やスクーフ監督の映画「太陽」の解釈のされ方を検証し、受け手が各々の「内面」に「朕」の居場所を作り、同情し許すことで、今日に至るまでそれらの「不敬」な解釈可能性をつぶし続けていることを見た。

権力の中心に向かってアイデンティティを溶解させるこうした思考の枠組みが、戦争の「記憶」にはめ込まれた場合、弱者はもはや「人間」として見なされまい。当時の植民地や対戦国の人々、とりわけ女性被害者に対する根強い蔑視が日本にあり、南京大虐殺や所謂「従軍慰安婦」問題への反発が大きいわけは、「内面」化の方向との関連で解くことができるはずである。

「内面」を読むという文学的習慣は、全ての人の心を斟酌可能なものと仮定した点で、封建制度を撃つ画期的なシステムであったはずだった。それが近代日本において、なぜ権力者だけを守る装置に転化していったのかを、今後の研究課題としたい。

(4) 内藤寿子(近現代日本文学・思想史)

本研究の中心課題は、戦後の日本人の認識を大きく規定してきた表象文化の分析である。表象文化のなかでも、とくに日本映画を題材とし、アジア・太平洋戦争および植民地支配の描かれ方について考察をくわえた。

具体的には次の5点から日本映画の調査・分析をおこなった。1950年から2005年の「戦記路線日本映画」に関する調査。2005年に公開され、近年にない興行収入をあげた映画『男たちの大和/YAMATO』の作品分析。映画『連合艦隊』(1981年)、『大日本帝国』(1982年)、『男たちの大和/YAMATO』の比較分析。水木洋子による脚本『あれが港の灯だ』の調査・分析。和田夏十による脚本『ビルマの豎琴』の調査・分析。

からの研究成果については、科研費の研究会において口頭発表をおこない、およびの研究成果の一部は、論文(「脚本家・水木洋子と映画『あれが港の灯だ』」『湘北紀要』29号、「シナリオライター・和田夏十という存在」『国文学』53巻17号ほか)として発表した。日本映画に関する研究は、国内外ともに積み重ねられているが、「戦記路線日本映画」をはじめとする大量消費型作品の調査・分析は、まだ途についたばかりである。しかし、大量消費型作品が視聴者に与える影響は無視できず、視聴者の歴史認識の形成にも大きく関与している。本研究は、国内外の基礎研究の空白を埋める役割を果たすものである。上記の調査・分析をとおして、日本とアジア諸国との歴史認識の相違を考えるための具体的な事例を提出できた。

今後の課題としては、日本映画だけでなく、

週刊誌などの大量消費型メディアも調査・分析対象とし、戦後の日本人の歴史認識のあり方を明らかにしていく所存である。

(5) 駒込武(教育史学)

本年度においては、戦後日本における「台湾」の記憶と、戦後台湾における「日本」の記憶がどのように交錯しているかを検討するために、漫画など大衆的なメディアを含めた出版物や映画などを検討した。その結果として明らかにできたのは、次のようなことである。

第一に、戦後日本において台湾植民地支配の記憶は、全体として、戦前台湾に居住していた関係者の間で共有されるにとどまり、さまざまなメディアや研究・教育の場面でも忘却されてきた。他方、台湾においては、今日の若者の祖父・祖母の世代は日本語を話すことはできても、戦後「国語」とされた中国語は話せないなど身体化された記憶が否応なく存在する上に、日本による植民地統治時代につくられた建造物なども否応なく植民地支配の記憶を呼び起こす側面を持ってきた。記憶をめぐるこのような非対照的な関係性そのものがまず認識されなくてはならないといえる。

第二に、およそ1990年代後半あたりから、上記のような状況に変化が生じた。日本の植民地支配を経験した台湾人の一部が日本統治へのノスタルジアを語り始め、そうした内容を日本語で刊行する著書にも記す一方、日本人の中でもこうした台湾人による語りに対応して日本による植民地支配は台湾の近代化に貢献したのだということを説く者が現れた。たとえば、漫画という大衆的なメディアでこうした議論を展開したものとして、小林よしのり『台湾論』(2000年)は無視しえない影響力を発揮した。こうした新しい事態の展開を理解するにあたって重要なことは、「日台情結」とも表現される関係の中に実は同床異夢的な亀裂が存在することである。台湾においては、戦後国民党による再植民地化ともいべき事態が生じる中で、日本による植民地時代から台湾に居住していた人びとは全体として「親日派」的な存在として位置づけられ、政治的な権利を剥奪されてきた。1980年代末に台湾における戒厳令が解除されたことにより、こうした人びとの方が次第に社会生活の前面に登場するようになったわけだが、その場合の「親日的」とも見える発言は、何よりも国民党による統治への批判としての意味を持っていた。他方、日本人の側では、かつて植民地だった台湾や韓国の経済成長や民主化を目の当たりにする状況の中である種の自信喪失ともいべき事態が生じ、この自信喪失を埋め合わせるために「植民地の近代化に尽くした日本人」というイメージが求められる心理的土壌が形

成されていたといえる。本研究では、こうした同床異夢的な事態を漫画や映画などの解読により明らかにした。

第三に、小林よしのり『台湾論』が中文に訳されて台湾で刊行されて賛否両論を巻き起こしたことに象徴されるように、記憶の空間は台湾と日本という国境を越えて複雑な相互作用を繰り広げていることが明らかになった。「慰安婦」問題にしても、かつて「慰安婦」とさせられた台湾人女性についての台湾実業家許文龍の発言が小林の漫画に掲載され、中文訳で伝えられたその内容が台湾人元「慰安婦」および支援団体たる婦女救援基金会の憤激を買い、許文龍の発言する企業の製品のボイコット運動に発展するといった事態が展開されたことがわかった。こうした検討から、「戦後日本」における記憶のあり方を検討するためにも越境的な視座が必要とされることが明らかとなった。

(6) 上村英明(先住民族論)

2008年度は、沖縄と樺太を比較しつつ、その植民地としての記憶がどのように継承されているかについて、昨年度収集した資料に基づいて検討を行った。とくに、樺太は、日本政府が植民地(外地)と認定する中で、帰還者からは国内(内地)であると主張されている場所であり、同様に、沖縄は、日本政府が国内(内地)と認定している一方、植民地として扱われたという主張が行われる場所でもある。また、こうした関係性の中で、沖縄の戦争関連資料において、樺太の法的地位を巡る矛盾が無関心に扱われていること、また、「集団自決」の問題に関する記述の違いは、戦争の記憶を考える意味で、極めて興味深いものであった。

第一に、樺太は、1943年3月に内地編入されており、第二次世界大戦の終戦時には内地であったが、それ以前に日本人の構成比率の高い樺太では、1924年から内地戸籍を樺太で持てることになった。内地戸籍は、当時内地と外地を峻別する極めて重要な規準であった点、この事実は重く、それ故にソ連の参戦と上陸による混乱で内地戸籍が紛失するあるいは樺太から持ち出せない事態が発生した。内地戸籍の大部分が利用不可能となったことは、樺太と沖縄の共通した状況であり、樺太からの引揚者は国内において特別手続きに依存することになり、また今日でさえ、樺太戸籍事務は、外務省が担当している。この点、帰還者が樺太は内地であったと主張することは、戦争の記憶という点からもまた法制度上も根拠のないことではない。(もちろん、樺太先住民族の視点を別途その土台として考慮することは不可欠である。)

第二に、ソ連は1945年8月9日に樺太侵攻作戦を開始し、北緯50度の国境から侵攻する一方、8月11日には真岡(現在のホルム

スク)に上陸作戦を行った。そして、ソ連軍による侵攻作戦の完了は、8月28日のことであった。この間、樺太でも悲惨な「集団自決」事件が繰り返され、こうした記録はさまざまな形で保存されている。しかしながら、これらの「集団自決」に関して、樺太帰還者の間からは何の問題提起や抗議も行われておらず、場合によっては、依然英雄的行為として賞賛されているケースも少なくない。この点、沖縄と樺太の差異がどこから生じたのかについて、民族的な背景や歴史的背景に関する今後の検討が必要だろう。

第三に、樺太の法的地位に関して、沖縄県平和祈念資料館は、昆乱した取扱いをおこなっているが、それそのものは場当たりのなものであって、一定の整理が進められているわけではない。例えば、当資料館の「平和の礎」には、樺太出身日本兵の名が刻まれているが、当初は「北海道・樺太支庁」であった。しかし、「北海道・樺太支庁」は存在しない。その後「樺太」に書き換えられたが、内地戸籍に基づく日本兵の出身地別リストには、現在の47都道府県があるのみで「樺太」という項目はない。

この昆乱は、資料館に責任があるというよりも、戦後の日本の研究状況が日本の「空間認識」(植民地と国内、外地と内地の区分)に関し、日本政府の見解を無批判に承認してきた結果である。この点、「戦争の記憶」という視点から、植民地問題に関する再検討が必要とされるだろう。

(7) 内海愛子(戦後補償論)

日本軍の捕虜になった連合国兵士と民間抑留者の戦争の記憶が日本で注目されるようになったのは1990年代以降である。

日本の戦後処理が不十分ななかで、これまでの研究関心は日本国内とかつての「大東亜共栄圏」に集まっていた。だが、戦勝国だった連合国のなかで深刻な戦争トラウマに苦しみ、その記憶からときはなたれないでいる人びとがいる。日本軍の元捕虜、東南アジア各地で抑留された民間人である。1990年代にかれらが日本政府に謝罪と補償をもとめて提訴した。

内海はこれら補償や民間人の抑留所に勤務していた朝鮮人の問題から、捕虜や民間人の戦争と戦後の記憶の問題に関心を抱いてきた。1990年代後半から、抑留されたオランダ人女性の手記の翻訳やオーストラリア人元捕虜との国際会議をもってきた。10万を越す連合国捕虜、8万人をこす民間抑留者の記録は、各国公文書館や戦争博物館に収集されている。

日本では捕虜研究や民間抑留者の研究は、ようやく緒についたところである。

3年間の研究会では、おもに日本軍の捕虜政策に焦点を絞ってきた。今後は民間抑留者

の政策をすすめたいと考えている。

(8) 李省展(近代東アジア史)

在日朝鮮人の教育に関連する記憶収集作業としてのインタビューを手法とする研究は、これまでの近代史研究/植民地教育史研究の間隙を埋め、補完する作業であるのみならず、それらを組み替え新たな可能性を切り開く研究として位置付けられる。植民地支配は一樣ではなく、地域、階層、ジェンダー、個人などさまざまな偏差が存在する。また支配するものと、されるものとの間の権力関係 抵抗と協力、さらに教育についていえば、教育をするものと、受けるものとの間の断絶や相互性にも注目せねばならない。したがってこのインタビューに基づく研究は教育を受ける側の記憶や眼差しを取り込むことにより、その記憶や眼差しを梃子としながら植民地教育ならびに戦後日本における教育の一端を明らかにするとともに、全体像解明への布石となす研究へと進展していかねばならないと考えている。

「近代性」と「植民地性」そして「伝統」が複雑に交錯する植民地朝鮮、そこにおける教育が結果として「在日」を余儀なくされた朝鮮人一世にどのような影響を与えたのか、また冷戦構造下の祖国分断とポスト・コロニアルを生き抜いた「在日」一世と教育との関係を明らかにするため、牧師であった李仁夏氏(1925~2008)、著名な画家の呉炳学氏(1927~)へのインタビューの手法を用いたケース・スタディを行った。その結果見えてきた事柄を植民地期に限定し以下に記す。李氏、呉氏の両者に共通するものとして、言語の二重性を挙げる事ができる。家庭では朝鮮語を使用し、学校教育では日本語という二重生活を強いられた実態が存在した。李氏へのインタビューにおいて明らかになったことは朝鮮における私立学校の独自性である。私立泰成学校においては皇民化政策期においても、教育勅語の朗読や神社参拝がなされていなかったこと、南次郎総督の歓迎・謁見式における君が代斉唱の歌声の弱さ、結果としてそれらは閉校処分へと繋がっていったのであるが、これらのことから明らかのように私立学校に一種の植民地支配に対抗するディスタンスが存在しえたことが明白となった。また呉氏へのインタビューを通じても同様に植民地教育に対する一種のディスタンスを読み取ることができる。呉氏はノンポリであると自己規定しながらも、東方選擇、創氏改名、軍歌などの項目における幾度もなく述べられた「強制」という言説、平壤公立商業学校における日本人学生と朝鮮人学生との交わることのない関係性、校長の説教を意図的に聞き流していたこと、「皇民化」を必死に説く教員に対する朝鮮人学生の侮蔑と無視などにある種の植民地教育との断絶

を読み取ることができる。呉氏の姿勢は、自己に必要なものは摂取し、必要と思えないものは強制という形で甘受するかまたは拒否するという、植民地支配下における個人の選択性に依拠したサバイバルとさえいえるものである。一連のインタビューの手法を用いた記憶研究を通して、記憶とは個人の記憶にとどまるものではなく、「記憶の場」としての認識が重要であると考えてに至った。一つは記憶そのものが他者との関係性において形成されていることが挙げられるが、記憶は記憶を保持者の外部への働きかけを通じて形を成すものであるということがある。また一つとして他者からの記憶保持者への働きかけによりそれは、忘却の岸辺から救い出され、鮮明な記憶として蘇ることもある。さらに記憶の劣化、すり替えなど種々の問題もあるが、それは当時の時代状況を精査し勘案することにより、また対話のプロセスを通じてある程度克服できるものであると考える。個人の記憶と集団の記憶には乖離も存在するが、個々人の記憶を収集し、丁寧に繋ぎ合わせることにより、権力やマスメディアの介在などによる社会意識や集団の記憶との乖離の度合いや、一致度を測ることが出来ると考えられる。

高齢化を迎えた「在日」一世へのインタビュー作業は急務である。今後、この研究を土台としてジェンダー、階層などにも留意しながら教育に関して出来るだけ多くの「在日」一世へのインタビューを試みて行きたい。(ほかに齊藤小百合(憲法学)の研究「国家と追悼」があり、ゲスト講師の報告もあったが、これらについては、スペースの都合上、HPにて紹介する。)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

齊藤小百合「立憲主義の邂逅と、その不在」(『キリスト教史学』62集 2008、p3-14 査読無)

内藤寿子「シナリオライター・和田夏十という存在」(『国文学』53巻 17号、2008 p60-67)

〔学会発表〕(計2件)

李省展「Empire, Modernity and Mission Schools: The Case of Sungsil School and College in Pyongyang, Korea」(North East Asia Council of Studies of History of Christianity, Theology Hall, Yonsei University, Seoul, Korea. 2007.8.21)

李泳采「冷戦終結以降の北朝鮮の対日外交の展開と変容」(朝鮮半島における秩序変革に関する日中セミナー)慶應義塾大学東アジア研究所「朝鮮半島における秩序変革」プロジェクト(中国延辺大学、2007.8.20)

〔図書〕(計7件) 小此木政夫・磯崎敦仁編『北朝鮮と人間の安全保障』(慶応大学出版会 2009.3、p292)うち李泳采「8

章 日朝不正常関係」と二つの人道問題」「10章日本のNGOによる人道支援の現況と展望」

関礼子・原仁司編『表象の現代』(翰林書房 2008.10、p301)うち篠崎美生子「「朕」の居場所」

内海愛子『キムはなぜ裁かれたのか』(朝日新聞出版 2008.10、p382)

上村英明『アイヌ民族一問一答』(解放出版社 2008.1、p134)

駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』(昭和堂 2007.4、p380)うち、駒込武「序章 帝国と「文明の理想」、李省展「第7章 帝国・近代・ミッションスクール」

姜信子『うたのおくりもの』(朝日新聞社 2007.2、p224)

高橋哲哉・村井吉敬・姜尚中・辛淑玉・内海愛子・李省展著『ちょっとヤバいじゃない? ナショナリズム』(解放出版社 2006.10、p237)

〔その他〕

研究会HPを公開

<http://www.postwar-memories.org/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

李 省展 (I SONJON)

恵泉女学園大学・人文学部・教授

研究者番号:10279664

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者

内海 愛子 (UTHUMI AIKO)

大阪経済法科大学・客員教授

研究者番号:70203560

上村 英明 (UEMURA HIDEAKI)

恵泉女学園大学・人間社会学部・教授

研究者番号:90350511

駒込 武 (KOMAGOME TAKESHI)

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号:80221977

篠崎 美生子 (SHINOZAKI MIOKO)

恵泉女学園大学・人文学部・准教授

研究者番号:40386793

内藤 寿子 (NAITO HISAKO)

湘北短期大学・非常勤講師

研究者番号:90367003

李 泳采 (I YONCHE)

恵泉女学園大学・人間社会学部・専任講師

研究者番号:30460108

齊藤 小百合 (SAITO SAYURI)

恵泉女学園大学・人間社会学部・教授

研究者番号:50308293

姜 信子 (KAN SHINJA)

作家・研究協力者